

## 能登半島地震関連ボランティア

～能登半島の創造的復興とともにあゆみ、地域創生に貢献する全学的な取り組み～

団体名 ● 金沢星稜大学地域連携センター

### はじめに

2024年元日に発生した令和6年能登半島地震は、甚大な被害を石川県にもたらした。本学の学生及び教職員も多数被災し、震源地から100km離れた本学でも校舎一部損壊や土砂崩れによるグラウンド利用不可等の被害に遭った。

本学は地理的に能登に一番近い私立大学で、能登キャンパス事業、ゼミナール活動及び星稜ジャンプ地域活動プロジェクト等で能登をフィールドとして多くの活動を行っている。

本学の第4次中期計画(2024-2028)で「能登半島の創造的復興とともにあゆみ、地域創生に貢献する全学的な取り組み推進する」ことを目標に掲げた。

地域のニーズに応じて、中期計画前年度であるが、本稿では、地域連携センターが把握する能登半島地震関連ボランティアについて記述する。

### 活動内容

#### (1) 学生ボランティアの登録

2024年1月29日、全学生へ、能登半島地震復興事業に関するボランティアの募集案内を以下のとおり発信した。

〔能登半島地震の復興支援事業に関するボランティアの募集について〕

能登半島地震の復興に関して、学生ボランティアの派遣、各自治体等が主催する復興事業の支援に加えて、学内で支援イベント等の開催を予定しています。災害ボランティアは瓦礫の撤去や引っ越しの手伝い等の力仕事のみならず、ボランティアセンター運営の手伝いやイベント・サロン活動の支援等多岐にわたっています。金沢星稜大学地域連携センターでは地域のニーズを捉え、皆さんへ情報を発信します。

募集の結果、登録者は135名で内訳は下表のとおりである。

| 学年／学部 | 経済学部 | 人間科学部 | 人文学部 |
|-------|------|-------|------|
| 1年生   | 24   | 6     | 3    |
| 2年生   | 23   | 9     | 7    |
| 3年生   | 32   | 7     | 10   |
| 4年生   | 9    | 2     | 3    |
| 合 計   | 88   | 24    | 23   |

#### (2) こども支援

加賀市の宿泊施設ホテルアローレへ避難しているご家族内約20名のこどもたちサポートで、絵本の読み聞かせや、遊び相手などを行った。

こども支援活動は人間科学部こども学科の直江教授、三好教授、丸井准教授、連講師、福田助手が担当し、2月1日(木)～3月26日(火)の期間に9回訪問し、延べ31名の学生が参加した。

リフレッシュしてください

ホテルアローレ

## 子どもと一緒に遊びます

金沢星稜大学人間科学部  
こども学科

開催日時

|                        |                        |                        |
|------------------------|------------------------|------------------------|
| 2/1(木)<br>10:00～11:30  | 2/9(金)<br>10:00～11:30  | 2/13(火)<br>10:00～11:30 |
| 2/19(月)<br>10:30～17:00 | 2/26(月)<br>10:00～11:30 | 3/11(月)<br>10:30～17:00 |

お兄さんお姉さんが出し物をするよ

☆未満児のお子さまから参加いただけます  
☆保護者の方の付き添いは自由です  
☆ご自由に出入りください

以下はこども学科の先生方からの報告を記載する。

#### 報告1

ホテルのロビーに入ると、子どもたちが近寄ってきてくれました。ある男の子は一直線に学生さんに抱きついていました。お母さまからも「遊んでくれる人を心持ちにしていたので」と。私から見たら、プラスチックのおもちゃだったり、魅力を感じにくいかるたであっても、子どもたちと学生が触れ合えば、たちまち魅力的なおもちゃになっていました。

そう思うと、物も大切なのですが、やはり人と人とのかけわりなのだと思います。

#### 報告2

小学生の子ども達が「リモート授業が休みになったから、大学生と遊べてうれしい」「この日を楽しみにしていた」と笑顔で話してくれました。毎回来られる子どもたちはお兄さんお姉さんを待っていますし、少しの時間ですが、子どもには発散できる時間、保護者さんにはほっこりできる時間になっていると思います。

### (3) 災害ボランティア

石川県県民ボランティアセンターと地域連携センター間との連携で、以下のとおり七尾市内において災害ボランティア活動を実施した。

2月23日 教職員8名、学生21名 参加

活動場所：七尾市中島町

2月26日 教職員3名、学生27名 参加

活動場所：七尾市内

2月28日 教職員3名、学生36名 参加

活動場所：七尾市和倉温泉、中島町



災害ボランティアは前記のボランティア登録学生を対象に案内し、その後、募集定員に余裕があったため、追加で全学生対象に募った。併せて教職員へ参加を呼び掛けたところ、14名の教職員が参加した。

参加学生及び教職員には日本財団ボランティアセンター「5分で学ぶ災害ボランティア①～⑥」(YouTube)並びに「石川県 災害ボランティア活動ブック」を確認することで災害ボランティア事前研修に振り替えた。

災害ボランティア活動は、少人数のグループに分かれて被災者宅へ訪問し、廃棄する家具や家電製品等の搬出し、指定のごみ置場で回収物の分解作業や分別作業を行った。



### (4) クラブ活動のボランティア

#### 学生赤十字奉仕団の活動①

2月16日、NPO 地球元気村が主催する、輪島市役所前において、被災地域の皆様及び支援活動に携わっている関係者を対象の炊き出し(ほうとう鍋)に本学池田 名誉教授、連 講師、学生3名が参加した。

#### 学生赤十字奉仕団の活動②

2月22日、学生赤十字奉仕団が主催となり、穴水町内の小学校、中学校においてミスタードーナツを配布し、併せてメッセージ贈呈した。

穴水町教育委員会とミスタードーナツ高柳店の協力を受け、池田 名誉教授、連 講師、学生3名が参加した。



## (5) 学習支援ボランティア

石川県教育委員会学校指導課から、医王山スポーツセンターへ集団避難中の珠洲市、能登町の中学生を対象とする学習支援ボランティアの依頼があった。学習支援は授業中における個別質問対応が含まれるため、本学のCDP教員コース受講者を対象に募集を行った。

4月から英語教員として採用された学生、体育科教員を目指す学生、小学校教員を目指す学生と、様々な教員免許状取得もしくは取得を目指す21名の学生が参加した。

学習支援ボランティアでは、授業中に教室を巡回し、授業に集中していない生徒へ注意を促したり、授業についていけない生徒の支援を行った。また、昼休みに体育館やロビーで子どもと過ごしたり、質問等に対応した。



## 参加学生の感想1

生徒と良好な関係を築き、信頼してもらうには、生徒との距離感、会話で使う言葉、話題に至るまで様々な点に気を遣わなければならないということを、今回のボランティアに参加する度に痛感しました。しかし、頭では分かっている、上手く「学習支援」という役回りをこなすのはとても難しいものでした。能登半島地震によって、色々なバックグラウンドを抱えた中学生がおり、優しい言葉で生徒の心のケアを促したい一方で、子どもたちの学習に遅れが出ないように、授業や自習の場面では、少し厳しい言葉でメリハリを持たせなければならないという葛藤を何度も感じ、教育現場の雰囲気や少しでも感じられたので、教員の仕事に着任する前に本当に良い経験ができました。

## 参加学生の感想2

私は、小学校の教員を目指しているのですが、最初は小学生と中学生がどれくらい違うのか、どんな言葉遣いをするべきなのかなど、わからないことが多く、とても緊張していました。しかし、ボランティアの回数を重ねるごとに生徒のみんなが顔や名前を覚えてくれて、毎回のボランティアが楽しくなっていく、緊張も少しずつなくなっていきました。生徒のみんなが受け入れてくれたことが素直に嬉しかったし、生徒のみんなの心の負担を少しでも和らげてあげたいという気持ちになりました。

学習支援ボランティアを通して、生徒や全国の様々な場所から来られた先生方との繋がりを持てたことがとても嬉しく思いました。もしも、私がボランティアに参加していなければ、なかった縁です。今回のボランティアでの活動を糧にして、教員を目指す者として日々成長していきたいと思いました。そして、将来違う場所で災害が発生した時には、積極的にボランティアなどに参加して、人の役に立ちたいです。

## 成果、結果の考察

本学の能登半島地震復興ボランティアが本格的な始まりは、学生へのボランティア参加募集案内である。大学、短期大学部生約3,000名を対象に発信し、翌日までに76名の登録があり、最終的には135名の登録、未登録の学生でも本稿で紹介したボランティア活動に参加している学生も存在するため、ボランティア参画する意志を持つ学生が潜在的に存在すると推察する。

学生の中には実際に被災した者、ご家族やご親戚が被災した者、県外出身者であっても何か活動したい者。様々な背景をもつ学生たちが、自分の意志で積極的に能登半島地震復興ボランティアに参加することに頼もしさを感じる。

また、本学は被害甚大な二市二町の自治体(七尾市、珠洲市、能登町、穴水町)と連携協定を締結しており、各地域出身学生や自治体のイベントに参加した学生からも特定地域でのボランティア参加の意志表示を受けている。

大学は高等教育機関の使命として社会貢献が求められる、まさしく今、未曾有の災害に対して大学ができること、学生たちができること、そして地域のニーズを把握し、地域へ還元するリソースが確保できたと考える。

## 今後の課題、展望

本学が携わる能登半島復興は中長期のビジョンを持って実施しなければならない。今回の活動名は、「能登半島地震関連ボランティア」であるが、本学が掲げる創造的復興を実現するためには、ボランティア参加のみならず、チャリティーイベントや能登へ戻った子どもたちとの交流会開催等、様々な活動参加が必要となるため、来年度の本稿報告は「能登半島地震復興事業」となるであろう。

本稿執筆中に間に合わなかったが、金沢星稷大学と金沢星稷大学女子短期大学名が入ったビブスが出来上がったので、本年3月末参加予定の災害ボランティア活動から利用する予定である。



最後に、2024年2月～3月における能登半島地震ボランティアに係る経費(交通費、ヘルメット購入費、ビブス購入費、その他消耗品費)は、「公益財団法人スポーツ安全協会 令和5年度スポーツ活動等普及奨励助成事業／大学災害ボランティア活動支援事業」の助成を受けて実施したことを報告する。

本学のボランティア活動を安全に遂行できたのは助成のおかげであり、この場をかりて、公益財団法人スポーツ安全協会に感謝申し上げる。